

東大寺の大仏は、紫香樂でつくられ始めたことについては前回お話ししました。今回は、なぜ紫香樂で大仏を作ろうとしたのかについてお話しいたします。

紫香樂で大仏がつくられるようになった理由については、大きく二つの説があります。

一つは、森林資源説です。紫香樂の語源は「繁る木」ともいわれており、木に囲まれた地域ということなのでしょう。当時は甲賀杣や田上杣とよばれ、奈良の都の造営用木材を切り出した山々があったことも知られています。

大仏造営にあたっては、大量の物資が必要となります。ですから、豊富な森林資源を求めて紫香樂に足を向けたのだらうという考え方です。現に、大仏造営の中心が奈良に移ってからも、この地の森林資源は瀬田川の水運を活用して、奈良へもたらされることになりました。

もう一つが聖地説です。盧

舎那仏を安置する寺や国分寺はどのような場所に建立されたのでしょうか。国分寺造営の詔にもみえるように、国分寺とは国の華であることから建立にあたっては必ずよい場所を選ぶようにすることが指摘されています。さらには、あまり人家の近くで生活臭のするような所ではいけないとい

いつつも、あまり遠くで人に勞をかけるような所でもよくないというのです。不便過ぎないところで、宗教的な環境にあふれているところを選べというのです。そういった観点から見ると、飯道山や金勝山など山岳修行の舞台とな

った靈山に囲まれた紫香樂は、便利とはいえないかもしれませんが、よい場所であったといえるでしょう。さらに、大仏と紫香樂との接点があります。

東大寺の大仏造営において力を尽くした2人の僧がいます。東大寺初代別当の良弁と二月堂創建の実忠です。良弁とのかかわりは金勝寺

大仏造営の選地



甲賀寺

や大菩提寺、安養寺などといったこの地域の寺院の開基になつていふことから容易にうかがうことができます。では実忠とのかかわりはどこにあるのでしょうか。

二月堂の山側には縁起絵巻にも描かれている二つの祠があります。向かって左側は遠敷神社、右側は飯道神社です。遠敷神社はお水取りの行事に登場する遠敷神を祀った

もの。では飯道神社とは何なのでしょう。まさしく、紫香樂の北東にそびえる飯道山の神そのものなのです。二月堂を聞くにあたり、遠敷神とともにゆかりの深い飯道神を勧請したのでしょう。やはり、実忠も紫香樂と大きなかわりがあったと考えられます。

さて、当時の日本は唐に対して大きなあこがれを抱いていました。このころ造営された恭仁京は、洛陽に非常に似ており、なぞらえたことは確実です。盧舎那仏を本尊とする大仏造営の構想自体も、唐の洛陽郊外にあった龍門奉先寺の盧舎那仏をなぞらえたものと考えられています。

洛陽を模したのが恭仁京で、その郊外（1日で移動できる距離）に奉先寺になぞらえた寺院をつくり盧舎那仏を安置すると考えたのでしょう。大仏を造るべき場所は、森林資源に恵まれた地というよりは、靈山に囲まれた聖なる地であったのでしょう。
(滋賀県教育委員会 畑中英一)

靈山に囲まれた聖なる紫香樂